還暦

網走医師会
はまむき医院
浜　向　伸　治

今年は赤いチャンチャンコを着る年になり、同級生も定年を迎えようとしている。自分も気力・体力はとうに盛りを過ぎて、持病の慢性的な鼻づまりと後鼻漏は改善する気配もなく、日常診療での会話だけでも消耗を感じるようになっているのに誰も判ってくれず、職員に訴えても「先生は、まだまだ若いですよ」と相手にしてもらえない。

確かに、当医師会の開業医の中では、まだ自分は若手である。しかし、古希を過ぎてご活躍の先輩方が多数いらっしゃる中、申し訳ないが、自分にはそんなに働き続けられる自信はなく、仕事は減らしていきたいと思っている。

地方消滅、都市集中の流れの中で、当地方の人口も減っているが、それよりも医者が減るペースが早いのか、さまざまな負担は、むしろ増えている。かつては９件を数えた市内の内科系診療所も、今は半分以下に減ってしまい、休日当番の輪番制も維持困難となり、市に懇願して、休日診療所の開設と、出張医の招聘を実現していただけたことには、とても感謝している。

しかし、新規開業のように、固定医が増えるわけではなく、これから更に高齢化していくメンバーで増えるニーズに対応することは難しく、今後、５年後、10年先を考えると、恐ろしくなる。また、世の中では働き方改革が叫ばれて、勤務医の労働時間には見直しの動きがあるのに、診療所はかかりつけ医として年中無休で24時間対応しろと言われているようで、心配である。

本来、自営業者の管理職として、自分の労働時間は自由に裁量できるはずであり、働きたくなければ減らせばいいのだが、当地では周りの先輩は勤勉な方ばかりで、「お前ももっと働け」との無言の圧力は、真綿で首を絞められるように逃れがたいものがある。絶対に必要なこと以外はしないと極力サボっていた自分でも、さまざまな言いつけを皆断ることは難しく、ずっと逃げ回っていたこの会報誌の原稿すら、書かなければならない羽目になっていて、とても赤いチャンチャンコを着て、隠居できる雰囲気ではない。

誰か、若くて元気な先生、来てください。

散策もどき

北部檜山医師会
今金町国保病院
楯　　秀　貞

本は好きで、本屋も好きである。時間的に余裕がある時は、古書店にも顔を出す。『一寸の村にも、五分の意地。』も、古書店で求めた文庫本である。著者は、山下惣一氏。井上ひさし氏の著作に、彼が開催していた生活者大学校の副校長を務めたと書いてあった、九州のお百姓さんである。その本の中にこんな話がある。“できれば和服の着流しなんかが理想的で、そこはかとなく渡る風に着物の裾がはためいて、ためらいがちに足にまといつき、思索にふけりながら、ときどきものうげにその裾を払って、誰もいない白い砂浜の塵ひとつない渚に、二の字二の字の下駄の跡。”といった散策に憧れ、“夕暮れどき、浜を歩いたり、夕涼みに出かける人たちは、同じ村の住人ではあっても百姓ではなく、商店主だとかサラリーマンとか”で、百姓はそういうことのできない精神構造になっているのではないのかと、彼は意を決して、午後５時に農作業を中止し、目的の無い散歩へ出かけるのである。

さて、わが身はサラリーマンなれど、と考えざるを得なかった。時間に追われ、仕事を中断することもできず、出かけるのは出張である限り、目的が付いている。目的のない、いわば思索のための散歩は、確かに憧れである。１年半後には定年でもあり、定年に備えて、自分の精神構造を再検討する必要もあろう、とも考えた。

その１ヵ月ほど後に、チャンスが巡ってきた。仕事が珍しく予定通り終わり、月曜日からの仕事に備えて、午後４時にはサウナへ行くと決めているが、それまでには５時間もある。もちろん、読書でも良いのだが、散策は「今日でしょ」と決定。しかし、和服の着流しといった慣れないスタイルは無理だし、散歩よりはドライブが楽だな、となってしまう。さてドライブとなると、やはり目的地を決める必要がある。ますます目的の無い散歩からは遠く離れてしまうが、ドライブへ出かけると決定。

快晴、春の田舎道は、木々の若葉も美しく、快適なドライブとはなったが、肝心の思索はどこへやら、夕食を購入しての帰宅となった。山下惣一氏も目的なしに散歩することに失敗するのだが、私のドライブも、夕食を購入する目的で出かけたのと、何ら変わらない始末となってしまった。無目的に、あるいは大義名分なしに時間を過ごすのは、今のところまだ無理と諦めざるを得ない。諦めついでに、多くはない自由な時間を、今日は駄文を書くために費やしている。